

『考古学と文化史—同志社大学考古学研究室開設70周年記念論集—』
(同志社大学考古学シリーズⅧ) 別刷
二〇二三年四月一日発行

首長の本拠地と古墳

——茨城県出島半島を中心に——

日

高

慎

首長の本拠地と古墳

——茨城県出島半島を中心に——

日 高 慎

はじめに

古墳時代の墳墓が築かれた場所をめぐっては、首長の勢力圏に築かれたと考えるのが研究者の一致した考えだろう。例えば、河川の流域に継続的に首長墓が造られている場合や、同じ台地上に展開するいわゆる古墳群については、同一の首長（墓）系列として認識する。私も同様な観点から、首長の支配領域について常陸地域をもとに墳墓の様相から考えたことがある¹⁾。ただし、近年世界文化遺産に登録された大阪府の百舌鳥・古市古墳群については、それぞれの地域に根ざした勢力とみる見解と、あくまでも大和に本拠地はありながら墳墓は百舌鳥や古市に築いたとする見解がある²⁾。本稿では、首長墓の在り方から首長支配領域をいかに考えることができるのかを、改めて考えていきたい。

一 首長墓系列と支配領域

いわゆる首長墓系列から首長の支配領域を考える場合、首長墓が築かれた場所を基準にして論じるのが

基本であろう。首長墓が築かれた場所をもとに、河川流域や盆地あるいは同一台地上など地形に即して領域を考えてきた。広瀬和雄は、首長墓造営単位について、「各地の前方後円墳は、令制の「郡」(地域社会)単位のものが一般的だが、前期の播磨や讃岐、後期の東国などでは、あたかも「郷」(農耕共同体)単位で造営される。中期には香川県富田茶臼山古墳や広島県三ツ城古墳など「国」単位で造営されたかのようなケースもみられる」と総括し、様ざまな状況があったと考えた。³⁾

次城県筑波山麓における歴代の首長墓(図1)を検討した岩崎卓也は、桜塚古墳↓山木古墳↓土塔山古墳↓八幡塚古墳↓甲山古墳

墳という順番で広域に散在している状況について、「首長権が一地域集団に固定することなく、ムラを拠点とするいくつもの集団の間を、つぎつぎに移動するような、ルースな地域連合体だったのではないか、ということである。そうであれば、歴代の首長がそれぞれ

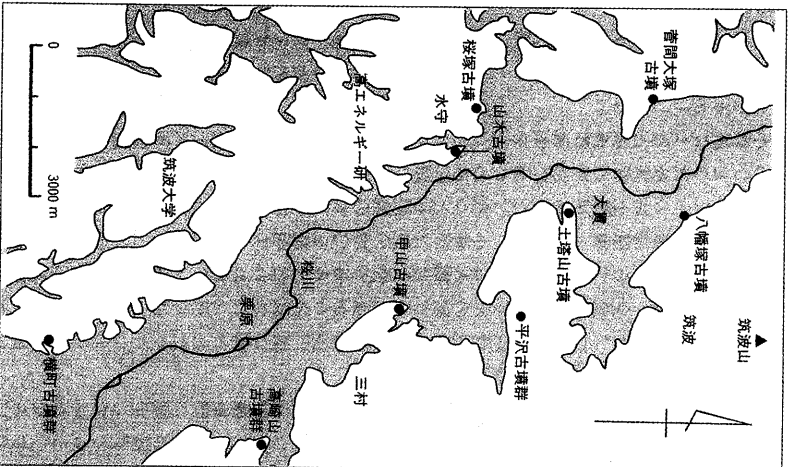


図1 岩崎卓也(1990)による筑波山麓の首長墓分布

首長の本拠地と古墳

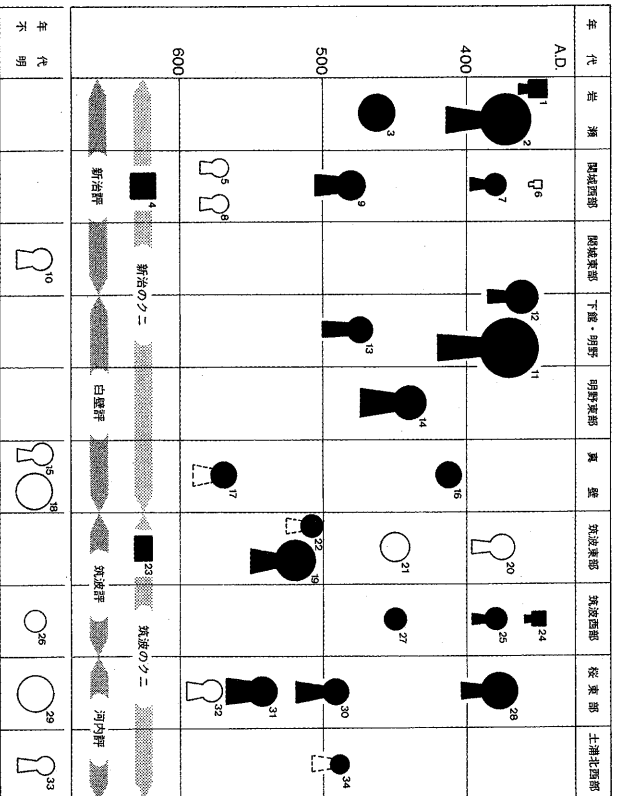


図2 滝沢誠 (1994) による筑波周辺地域の首長墓編年 (白ヌキは年代推定の根拠が乏しいもの)

れの出目集団の拠点近くに墓を築くた
め、散在的とならざるをえなかった
と捉えて、首長権がそれぞれの地域に
移動したと理解した。³⁾
筑波周辺地域の首長系列について、
滝沢誠は都出比呂志の提言も参考にし
て再検討した結果、「5世紀前半に首
長系譜の画期が認められ、それは地域
首長層の政治的再編成をともなう全国
的な政治変動を反映したものである
う」と述べ、⁶⁾ 断続しながらもそれぞ
れの地域で首長墓が築造されていること
を示した(図2)。岩嶋がというような
首長輪審制を説くことは難しいといつ
つも、各グループ内の首長墓の墓域移
動はなお検討の余地があると述べた。
所の違い、さらには古墳の規模の違い

をどのように理解するのが鍵になる。

二 出島半島における首長墓系列と支配領域

私は、茨城県かすみがうら市の出島半島において、古墳時代の首長墓と大規模遺跡と思われる遺跡の分布から、図3に示すように、大津郷領域、佐賀郷領域、安紡郷領域という律令国家における郷に相当する地域に古墳時代の首長支配領域を想定し、それぞれの地域で首長墓が築かれたと理解したことがある²⁾。徹底した分布調査により、包蔵地として遺物量が多く遺跡面積も広いものを集落の大規模遺跡と評価したが、それは首長居館が位置する可能性も想定している。逆に遺物量が少ない場合は面積も狭いようであり、集落としての規模は小さいと考えられた。首長墓については、二〇皿を超える前方後円墳³⁾、出島半島に小型ながら二基のみ知られている前方後方墳、中期の大型の円墳、終末期の比較的大きな円墳や方墳を抽出した。これら以外にも、後期から終末期にかけての築造と思われる前方後円形小墳がある。

図4に示したように、それぞれの地域で、ある程度継続して首長墓が確認できることが分かる。大規模遺跡の存在を踏まえると、首長墓が不明の時期にも確認できる可能性はある。ただし、中期については、首長系列が佐賀郷領域に集約された可能性がある。現状では大津郷領域・安紡郷領域には首長墓が確認できないが、大津郷領域では大規模遺跡が確認できることから集落は存在している。墳丘長六四mの牛渡銚子塚古墳が、墳丘長一八五mの茨城県石岡市舟塚山古墳と同様に中期前半の築造だとすると、佐賀郷領域の低地に径四〇mの牛塚古墳がある以外に他の領域では首長墓はなかったのかもしれない。時期が未詳の径四〇mの牛渡銚子塚東古墳も、この時期になる可能性がある。古墳時代中期には、百舌鳥・古市

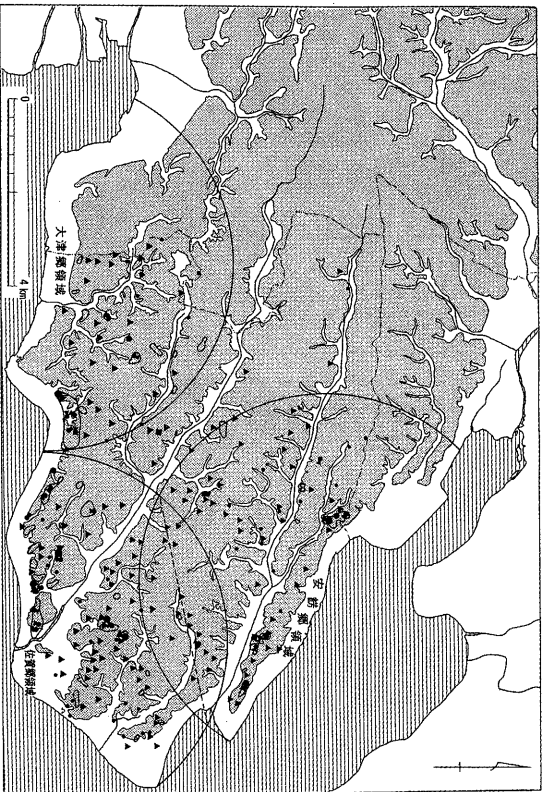


図3 出島半島における首長支配領域（日高2001）

古墳群のように巨大古墳が築造されるときも全国的に知られている。関東地域においても同様な状況を示す場合が多く、茨城県域の場合も舟塚山古墳の築造が大きな面期となっていたと思われる。

ここまでのところをまとめると、出島半島では前期の段階に大津郷領域・佐賀郷領域で首長墓が継続して築造され、中期に至ると佐賀郷領域にのみ首長墓が築かれ、後期から終末期になると大津郷領域・佐賀郷領域・安紡郷領域のすべてで首長墓が築造される。後期の大津郷領域では墳丘長四〇mの裏山古墳と権現塚古墳という比較的規模の小さな前方後円墳であるが、終末期に至ると径四〇mの車塚古墳が築かれる。佐賀郷領域は安定して首長墓が築かれており、終末期には一辺二五mの方墳の富士塚山古墳が境界領域に存在するが、墳丘規模での卓越性は

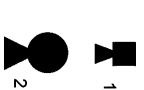

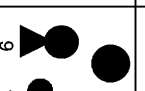

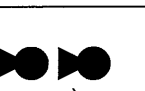
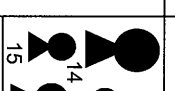



	大津郷 (加茂・戸崎地区)		佐賀郷 (牛渡・坂地区)		安勝郷 (柏崎・安倉・共倉地区)	
	首長墓	大規模遺跡	首長墓	大規模遺跡	首長墓	大規模遺跡
前期		○		○	?	○
中期	?	○		△	?	—
後期		○		○		○
終末期						

図 4 出島半島における首長墓系列と支配領域

- 大津郷 1. 赤塚 (30) 2. 天神塚 (63) 3. 裏山 (40) 4. 権理塚 (40) 5. 車塚 (40) 6. 柳梅台1号 (29) 7. 寺山1号 (60) 8. 牛塚 (40) 9. 銚子塚 (64) 10. 銚子塚東 (40) 11. 坂稲荷山 (70) 12. 十日塚 (40) 13. 富士塚山 (×25) 14. 富士見塚 (78) 15. 太子唐櫃 (40) 16. 大日山 (55) 17. 風返稲荷山 (78) 18. 笹塚1号 (×23) 19. 浅間山 (56)
- 安勝郷

感じられない。安勝郷領域では後期に墳丘長七八・九〇mの富士見塚古墳が突然築造され、その後風返古墳群で墳丘長五五mの大日山古墳、墳丘長七八mの稲荷山古墳、径五六mの浅間山古墳などが築造される。上田下方墳ともいわれる一辺二三mの笹塚一号墳も富士見塚古墳の近傍にある。つまり、前期には大津郷領域と佐賀郷領域、中期には佐賀郷領域のみ、後期には佐賀郷領域と安勝郷領域、終末期には大津郷領域と安勝郷領域および佐賀郷領域が拮抗しているように思われ

る。細かく見ると墳丘規模の差があるものの、継続して卓越した古墳が築造されているわけではない。

二 首長の本拠地とは

古墳時代後期には、出島半島の周辺地域で玉里（田余郷）、園部川・玉造（立花郷）、恋瀬川（茨城郷）に首長墓が築かれる。このなかで卓越した首長墓が継続して築造されるのが玉里古墳群であり、大規模古墳と中規模古墳がある。一方、終末期に至ると出島半島の風返浅間山古墳が最も規模の大きな首長墓となり、玉里から風返の勢力へと変化したかに思われる状況を呈する。^⑩しかしながら、あくまでもそれぞれの郷領域において首長墓は築造され続けているのであり、首長権が移動するといえるものではなさそうである。ただし、茨城郷領域では墳丘長九六四の府中愛宕山古墳の築造以降の状況が詳らかでない。舟塚山古墳群の周辺には後期から終末期の首長墓がないのかもしれない。

ここまで述べてきたように、古墳時代首長の本拠地とは、律令国家の郷の広さとはほぼ同じ領域として理解できるだろう。もちろん、広瀬和雄が述べるように、郡の領域や国の領域といった広さを想定すべき地域もあるかもしれない。常陸国には、『常陸国風土記』の記述や令制下の郡などにより、北から多珂・久慈・那賀・新治・茨城・筑波のクニがありそれぞれに国造が存在していたとされ、本稿で述べてきた領域は茨城のクニに相当する。茨城のクニは、門井直哉が述べるように「令制茨城郡に信太郎・行方郡・那賀郡の一部を併せた範囲」と理解できるだろう。^⑪

古墳時代首長の本拠地がそれぞれの郷領域の範囲であるならば、茨城のクニに相当する範囲、すなわち後の茨城郡域全体を統括するような存在を想定することは困難となる。ただし、佐々木憲一は玉里古墳

群を「複数系譜型古墳群」として認識しており、「大井戸古墳、三味塚古墳、富士見塚古墳、塩谷が注目に値する首長墳が所属する古墳群中に見られないので、後継首長が玉里古墳群に埋葬されたとして、特に不思議ではないだろう」と考えた^⑫。そうすると、玉里古墳群は複数領域の首長の共同墓域ということになるが、私は、富士見塚古墳の後継首長の墓を同じ安訪郷領域の風返古墳群のなかに想定しているので、玉里古墳群を「複数系譜型古墳群」としては認識していない。

茨城のクニを総括する存在が認められないとするならば、茨城国造の存在そのものを古墳時代の時期に想定することができないことを意味する。東国における国造の成立については、六世紀中葉、六世紀末から七世紀初頭、孝徳立評などによる七世紀中葉、さらには七世紀後半とする説など様ざまな意見が存在する^⑬。塩谷修は常陸国の古墳時代後期から終末期の首長墓の動向をそれぞれの地域ごとに総括し、「郡衙との関係も踏まえれば、大型円墳・方墳のみならず、最後の大型前方後円墳も国造墓と考えて不都合はない」とらえ、「古墳研究を通してみた国造制の成立は6世紀第4四半期頃が妥当」とした^⑭。塩谷が注目している移転後の茨城郡衙に隣接する茨城古墳の存在は重要と思うが、墳丘規模では風返浅間山古墳と同等である。以上のようなことを総括すると、古墳時代後期から終末期の時期に、茨城のクニに相当する領域で卓越した古墳を見出すのは困難であり、終末期の首長墓が築造されなくなる時期にこそ国造制の成立を考えたらどうか。つまり、孝徳立評の時期に国造制の成立をみるのである。古墳時代社会の終焉と軌を一にすると言えようか。

おわりに

古墳時代首長の本拠地について、本稿では非常に狭い範囲で理解した方がよいと述べてきた。他の地域では律令国家の郡の領域で考えた方がよい場合もある。今後は地域ごとの違いについて詳細な比較検討をおこない、その理由を聞く必要がある。今後の課題としておきたい。

註

- (1) 日高慎 二〇一〇「茨城県玉里古墳群にみる古墳時代後期首長墓系列」『考古学は何を語るか』(同志社大学考古学シリーズⅩ)二六三～二七四頁
- 日高慎 二〇一四「菅原の前期大型古墳と北方の地域社会」『古墳と縄縄文化』二二一～二三三頁 高志書院
- 日高慎 二〇一五「内海世界の海浜型前方後円墳 ①「香取海」沿岸」『海浜型前方後円墳の時代』七六～八九頁 同成社
- (2) 白石太一郎 一九九九「古墳とヤマト政権」一八～二三頁 文春新書
- 広瀬和雄 二〇一八「古代首長と中世領主」『法と国制の比較史』三七二頁 日本評論社
- (4) 岩崎卓也 一九九〇「古墳の時代」一七四頁 教育社
- (5) 都出比呂志 一九八八「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢 史学篇』二二一～二六頁
- (6) 滝沢誠 一九九四「筑波周辺の古墳時代首長系譜」『歴史人類』二二二 一〇八頁 筑波大学歴史・人類学系
- (7) 日高慎 二〇一〇「古墳時代」『霞ヶ浦町分布調査報告書―遺跡地図編―』四六～五九頁 霞ヶ浦町教育委員会・筑波大学考古学研究室
- (8) 日高慎 二〇二二「古墳時代の首長と女性人物埴輪」『ジェンダー分析で学ぶ女性史入門』三三頁 岩波書

- 店において首長墓の基準を若干述べておいた。詳細については別稿を留意している。
- (9) 岩崎卓也 一九九四「関東地方東部の前方後円形小墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』四四 五三〇七七頁
- (10) 日高前掲註(1)日高二〇文獻。
- (11) 門井直哉 二〇二二「常陸國の形成過程に関する一考察」『福井大学教育地域科学部紀要』二二五〇四五頁
- (12) 佐々木憲一 二〇一八「総括震ヶ浦沿岸地域における首長系譜の併存」『震ヶ浦の前方後円墳』二五四頁
明治大学考古学研究室
- (13) 日高前掲註(7)五三〇五四頁。
- (14) 塩谷修 二〇二二「常陸國風土記」にみる國造國・郡(評)關係記事と大型古墳『古代文化』七二四頁
六五頁
- (15) 塩谷前掲註(14)六七頁